

# 映画「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」(1970、台湾)について

— 戦後台湾における「桃太郎」—

武久康高

## 1 はじめに

約50年続いた日本統治時代、台湾では主として学校教育を通じて「桃太郎」が流通し、人々のなかにそのイメージを形成していった。その後、1945年に日本の植民地支配が終焉を迎え、台湾の政治体制は中華民国へと引き継がれていく。だが、戦後の台湾社会においても「桃太郎」は、映画や漫画といったサブカルチャーの分野で様々な形を変えながら作られていった。筆者は、こうした戦後台湾で作られた「桃太郎」について、それらがどのような環境のもとに生まれ、そこでいかなる再創造がなされているのかについて調査・検討を進めている。

江戸時代以降の「桃太郎」の変遷については、滑川道夫『桃太郎像の変容』<sup>1</sup>や鳥越信『桃太郎の運命』<sup>2</sup>などで詳細に跡付けられている。だが、こうした従来の研究では、戦前は「日本」だった旧植民地における「桃太郎」の変遷については見落とされている。さらに戦後の台湾社会において、日本人はしばしば「桃太郎」と称されるなど、台湾には「日本人＝桃太郎」という連想関係が存在している<sup>3</sup>。そのためこうした台湾における「桃太郎」のありようを論じることは、従来の桃太郎研究の欠を補うとともに、戦後台湾における「日本」という存在について検討する際の有効な視座ともなりうるものである。

そこで本稿では、戦後台湾で制作された「桃太郎」のうち、1970年（民国59年）に公開された「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」について、その概要および制作当時の状況を紹介したい。

## 2 「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」をとりまく状況

今回取りあげる「神童桃太郎」と「桃太郎斬七妖」の現存は確認されていない。また、それぞれの内容を記した映画パンフレットや雑誌等の資料も未確認である。そのため現在のところ、本映画の具体的なあらすじについては不明と言わざるをえない。そこで本稿では、監督やキャスト、当時の状況など、本映画をとりまく様々な事情に

ついてまとめたい。

## (1) 映画「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」をめぐる状況

### 【撮影経緯】

1969年4月19日、国民教育電影会社が「桃太郎」を改編した「国語片」（中国語映画）の教育映画「金童收妖」の撮影を開始する<sup>4</sup>。主役は「大忍術映画ワタリ」や「仮面の忍者赤影」の青影役として台湾でも著名であった金子吉延。監督は、台湾に渡りメガホンをとっていた湯浅浪男がつとめた。また、特撮シーンの責任者として、円谷プロダクションの塚本貞重が招聘されている。撮影はすべて台湾でおこなわれ、6月半ばに終了した<sup>5</sup>。

撮影中、「金童收妖」という題名が「神童桃太郎」に変更され<sup>6</sup>、本映画の主役である金子吉延・王彬彬を起用した続編等を制作することが決定する<sup>7</sup>。同年8月、金子吉延が再度来台し、続編（「桃太郎斬七妖」）の撮影が始められた。なお、この続編の制作会社は錦華有限公司である<sup>8</sup>。

### 【上映期間】

地域によって上映期間に異なりがみられ、台北市での公開は、「神童桃太郎」が1970年1月30日から2月4日まで、「桃太郎斬七妖」が1970年4月2日から4月6日までであった。どちらも子供向けの映画であるため、冬休みや児童節（4月4日）に合わせた公開となっている。初上映は、「神童桃太郎」が1970年1月2日に屏東の屏東劇場で<sup>9</sup>、「桃太郎斬七妖」が1970年2月11日に嘉義の天榮劇場・大光明劇場で、それぞれなされている<sup>10</sup>。これらの劇場で上映された理由は不明であるが、おそらく台湾中南部において日本語映画の人気が高かったことがその背景にあると考えられる。ちなみに、1961年に公開された台湾語映画「桃太郎大戰鬼魔島」（「桃老大伏匪記」）も、台湾中部の嘉義市で初上映され、以後、中南部の都市を回った後に北部・台北市へと向かうというルートを辿っている<sup>11</sup>。

### 【内容】

前述のように本映画の現存は確認されていない。その内容を記した映画パンフレットや雑誌等の資料も未見である。そこで、当時の新聞記事や映画広告からその内容を推測してみると、「民間神話故事『桃太郎』改編的教育片」（『聯合報』1969. 4. 18）、「『金童收妖』是一部兒童特技教育影片」（『經濟日報』1969. 4. 18）、「神怪武俠片『金童收妖』」（『聯合報』1969. 5. 22）、「國民公司兒童神怪片『金童收妖』」（『聯合報』1969. 6. 18）などとされており、日本の民話である「桃太郎」を基にした、子供向けの特撮「神怪」（神仙と妖怪もの）映画であると考えられる。そのうち「神童桃太郎」

は、巨大な桃から生まれた桃太郎が、妖怪に捕まった女性を助けるため戦うといったもの、また続編である「桃太郎斬七妖」は、前回の仇を討とうとする鷹大王をはじめとした妖怪たちと桃太郎とが戦うといったものであると想定される。

【資料1】「神童桃太郎」映画広告

驚天動地奇異童話  
 歴險打鬥大鉅片！  
 你從來沒有見過  
 比這更好看的電影！  
 故事獨特！  
 場面偉大！  
 耗資千萬！  
 空前偉構！  
 第一  
 眼福

特選  
 天王  
 巨片

國際  
 南京  
 金山  
 僑聲  
 北勝

天降巨桃  
 躍出神童  
 力大無敵  
 武功百發  
 人小胆大  
 混戰百合  
 潮人越嶺  
 翻義成人  
 孝義感人  
 寸幕驚彩

飛降敵大  
 斬妖戰混  
 新獅戰混  
 神魔斬敵  
 ！精狸狐敵  
 ！潭蛇靈戰混  
 ！山人巨波勇  
 體合綜色彩

小飛龍、洪影全童星  
 金子吉延  
 王彬  
 女對陣陳慧美  
 空軍主演

湯慕華  
 導演  
 亞次  
 導演

近月  
 重聯  
 映

神童  
 桃  
 太郎

白羽良純  
 為家邦先  
 ！慘！世  
 ！神

勇敵無比  
 ！！！  
 ！！！  
 ！！！

見神助好道  
 怪勇妖人  
 為

氣冷 氣冷 氣冷  
 病好 病好 病好  
 高享 高享 高享  
 受 受 受

滿容謝銘  
 獨故 12.50  
 特事 2.40  
 偉打 4.30  
 場開 6.20  
 面開 8.10  
 耗開 10.00  
 千片  
 萬資

實新  
 美 陳 慧 美  
 演 出 品

神童  
 桃  
 太郎

金子吉延  
 主演

【資料 2】「桃太郎斬七妖」映画広告

紅樓	大勝	南京	金山	僑聲	北新
10.30	11.00	11.30	11.00	10.50	10.30
12.30	1.00	11.30	1.00	1.00	12.30
2.30	3.00	2.20	2.50	2.50	2.20
4.30	4.50	4.10	4.40	4.40	4.10
7.00	7.40	7.00	7.30	7.30	7.00
9.00	9.40	9.00	9.30	9.30	9.10

  

4.00	南天	滿
5.50	10.30	
7.50	12.20	
9.50	2.10	

  

鷹大王復仇  
桃太郎出戰

# 桃太郎斬七妖

特技大王：  
湯慕華 作傑

天賜神威！！！！  
勢如破竹！！！！  
騎龜過海！！！！  
生擒巨人！！！！  
怒斬毒蠍！！！！  
花妖斷魂！！！！




鉅中的片  
桃太郎斬七妖

關山難越 騎龜過海  
三尺童子 天賜神威  
驚險萬狀 魔山收怪  
!!!

金子吉延 領主  
王彬 領主  
蘇雲 領主  
魯平 領主

湯慕華 傑作



## 《神怪片の流行》

【内容】項で確認したように、本映画は子ども向けの特撮「神怪」映画である。当時の台湾では、こうした「神怪」映画が流行していたようで、例えば1970年1月28日の『民族晩報』では、三年前に日本で「大魔神」が人気を博し、このような新たな特撮スタイルが刺激を求める観衆の欲求を満足させていること、また台湾でも同じような理由で「神怪」映画が流行していることが述べられている<sup>12</sup>。

それまでの台湾では「武俠」映画が流行していた。しかし1969年になると、「國片製作路線／今年將轉方向／偏重於拍喜劇片神怪片／武俠片已走下坡了」（『聯合報』1969. 1. 3）、「武俠片一落千丈／製片業者轉拍神怪片」（『聯合報』1969. 2. 5）と新聞が報じるように、「武俠」映画から「神怪」映画に流行が移ったようである。だが、台湾や中国の故事をもとにした「神怪」映画は、「神話片趨熱門 取材範圍太窄」（『聯合報』1969. 5. 15）とあるように、その題材にできる範囲が他の映画と比べて非常に狭いものであった。おそらくそのため、本映画では日本のお話である「桃太郎」が目につけられ、撮影がおこなわれたのだと考えられる。

## (2) スタッフ・キャストなど

### 【監督】

監督は湯慕華（帰化以前の名前は湯浅浪男<sup>13</sup>）。1927年ハルビン生まれ。新潟県小千谷の映画館主を経て映画界へ。第7グループ（制作プロダクション）に所属し、監督第一作は64年の「夜の魔性」（岩佐浪男名義）。ピンク映画や「血と掟」（元暴力団組長安藤昇の映画入り第一作）などの暴力団ものを手がける。1966年11月、日台合作「母ありて命ある日」の撮影をきっかけに台湾へ渡り、その後は台湾で監督業を続ける。1969年に中華民国への帰化を申請し、1971年6月に認められた<sup>14</sup>。なお、渡台後の監督作品は判明している限りで以下の通りである。

### 【湯浅浪男名義】

「霧夜の車站」（1966、永裕有限公司）、「東京流浪者」（1966、永芳有限公司）、「青春悲喜曲」（1967、永裕有限公司）、「尋母到東京」（1967、新亞有限公司）、「懐念的人」（1967、永新有限公司）、「難忘的大路」（1967、永新有限公司）、「法網難逃」（1968、永裕有限公司）

※『聯合報』1967年3月28日に記事がある「絶唱」（新亞有限公司）については、完成したかどうか不明。

### 【湯潜名義】

「狼與天使」（1968、現代電影電視實驗中心）、「小飛俠」（1970、現代電影電視實驗中心）<sup>15</sup>

### [湯慕華名義]

「神童桃太郎」(1970、國民教育電影公司)<sup>16</sup>、「桃太郎斬七妖」(1970、錦華有限公司)、「二郎神楊威」(1970、錦華有限公司)、「魔笛神童」(1970、錦華有限公司)、「甘羅拜相」(1971、台旭影業社)、「妙想天開」(1971、朝陽昇有限公司)、「朱洪武續集劉伯溫傳」(1971、台旭影業社)

※「戰國春秋」(國民教育電影公司)は『聯合報』1970年4月29日に、「洛陽橋」(國藝公司)は『聯合報』1970年6月5日にそれぞれ記事があるが、完成したかどうか不明。

### 〈日本人監督の渡台〉

前述したように、「神童桃太郎」では、監督を湯慕華(湯淺浪男)が、特撮シーンの責任者を円谷プロダクションの塚本貞重が、それぞれ務めている。

1950年代から60年代の台湾では日本映画に対する人気が高く、60年代には日台合作映画も少なからず制作された。例えば日活と中影の「金門島にける橋(海灣風雲)」(1962年)、大映と中影の「秦・始皇帝(秦始皇)」(1962年)、東宝と台製の「香港の白い薔薇(香港白薔薇)」(1965年)、「バンコックの夜(曼谷之夜)」(1966年)、にんじんプロと国光影業の「カミカゼ野郎 真夏の血斗(銀翼大決鬥、陸海空大決鬥)」(1966)等があったようである<sup>17</sup>。ちなみに本映画の監督である湯淺浪男が台湾で映画を撮るきっかけになったのも、日台合作「母ありて命ある日」の撮影のためであった<sup>18</sup>。

こうしたなか、香港や台湾の映画界が日本人監督を中国語映画の監督として招く動きも現れた。当時、日本の映画業界は不景気であり、監督たちは海外(香港や台湾)に活路を見出そうとしていた。一方台湾側は、近年盛んとなってきた中国語映画の監督が不足しており、効率良くスピーディーに撮影を進め、要求する報酬も少ない日本人監督に魅力を感じていたようである<sup>19</sup>。

以上のような映画界の動向に対する台湾人監督の反応は様々であった。例えば『聯合報』(1969. 2. 11)では、台湾人監督はこうした事態を平静に受け止め、「商売を奪われた」という感覚はないこと、さらに日本人監督は特に現代中国語映画や「神怪特技片」の撮影に適しているだろうと指摘している<sup>20</sup>。一方、『經濟日報』の記事(「談日本導演拍國片問題」1969. 5. 8)では、日本人監督が中国語映画を撮ることについて賛成の立場の人や「民族精神」から反対する人がいること、さらには反対派の台湾人監督らが連盟で文化局に請願にいくという動きがあることを伝えている。なお、そこでの反対派は、日本人監督の中国語映画は「国語片」を日本化してしまい、そのため東南アジアでの中国語映画の地位も失ってしまうと述べている<sup>21</sup>。

## 【出演者・主役】

### 「神童桃太郎」

・金子吉延（桃太郎役）、王彬彬、陳慧美、趙強、蔣振、沙麗文、陳劍平、高幸枝、黃俊、嘯仰、葛行王など。

### 「桃太郎斬七妖」

・金子吉延（桃太郎役）、王彬彬、蘇雯、魯平、田夢など。

「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」の主役は金子吉延が演じている。台湾では、1967年に金子が主演した「小飛龍ワタリ」（日本名「大忍術映画ワタリ」）が公開され人気を博した。そのため、例えば1969年に台湾で公開された「俠影」（日本名「仮面の忍者赤影」）。金子は青影役で出演）の映画広告でも、「小飛龍主角 金子吉延主演／再度掀起高潮」（「小飛龍主役 金子吉延主演／再度ブームが巻き起こる」『聯合報』1969. 7. 2など）と「小飛龍」「金子吉延」を前面に押し出した文言となっている。ちなみに、台北第一劇場で公開された「俠影」の映画広告<sup>22</sup>（26日間）すべてに金子吉延と「小飛龍」の名は登場するのに対し、主役である里見浩太郎の名が記載されるのはわずか2回のみである<sup>23</sup>。このように台湾での知名度が金子にあったため、本映画の主役として起用されたと考えられる。

## 3 おわりに

以上、本稿では「神童桃太郎」と「桃太郎斬七妖」の監督やキャスト、上映当時の状況など、本映画をとりまく事情についてまとめた。今後も引き続き台湾において調査を進めていくことで、本映画の内容も含めた諸事情をさらに検討していきたい。

## 付記

本研究は、平成21年度文部科学省研究費補助金（若手研究(B)課題番号 20720067）の助成を受けたものである。

## 参考

香港影庫HKMDB (<http://www.hkmb.com/db/index.php>)

台湾電影資料庫 (<http://cinema.nccu.edu.tw/cinemaV2/index.htm>)

- 1 滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、1981.3）。
- 2 鳥越信『桃太郎の運命』（ミネルヴァ書房、2004.5）。
- 3 その早い例としては、以前拙稿でもとりあげた『聯合報』1967年11月30日の記事があげられる（『戦後』台湾の桃太郎—映画『桃太郎大戦鬼魔島』（『桃老大伏匪記』）—『日本文学』

2006. 9)。最近の使用例としては、2008年8月の北京オリンピックで日本チームと中華台北チームが野球の試合をする時、「棒打桃太郎 台湾加油」といった応援がなされていたことをあげておく。

- 4 『聯合報』1969. 4. 18、『經濟日報』1969. 4. 18。
- 5 『聯合報』1969. 6. 18。
- 6 『聯合報』1969. 6. 18。
- 7 「據國民公司負責人徐慶松表示…該公司已決定於下月底左右開拍「神童桃太郎」續集及「白馬童子」等兩部新片、仍將由金子吉延及王彬彬合演、金子吉延將於下月中旬由東京抵台」(『聯合報』1969. 6. 18)。
- 8 『經濟日報』1969. 8. 3。
- 9 『中華日報』(台南市立圖書館藏版、1970. 1. 2)。
- 10 『中華日報』(台南市立圖書館藏版、1970. 2. 11)。
- 11 注3拙稿参照。
- 12 『民族晚報』1970. 1. 28。
- 13 湯淺浪男の経歴は、『日本映画監督全集』(キネマ旬報増刊12.24号 No.688、キネマ旬報社、1976. 12)、山崎隆「安藤達巳監督インタビュー」(『台湾映画』2009年号、東洋思想研究所、2009. 10)、ダーティ工藤「三輪彰監督インタビュー」(『映画論叢』22、国書刊行会、2009. 11)を参考にした。
- 14 『聯合報』1971. 7. 13。
- 15 「小飛侠」の上映年(1970年)は、香港影庫HKMDB (<http://www.hkmdb.com/db/index.php>)による。ちなみに『聯合報』では、新型武侠片「小飛侠」は1968年7月に完成し、その続集(「小飛侠大戰蝙蝠魔」)の撮影が決定したとある(1968. 8. 12)。両者には1年ほどのずれがあるが、本稿ではそのポスターがupしてある香港影庫HKMDBの年代を採用することとする。
- 16 台湾電影資料庫 (<http://cinema.nccu.edu.tw/cinemaV2/index.htm>)には、湯慕華の監督作品として「飛龍王子破群妖」(1970、國民教育電影公司)が載せてある。しかしおそらく「神童桃太郎」(「金童收妖」)の間違いだと考えられるため、ここでは省略した。
- 17 注13山崎インタビュー、p19。また、こうした日台合作が人気を博していたことに便乗して、『台湾新生報』(1970. 2. 11)の「新童桃太郎」の広告では、「中日合作／神怪變化／娛樂鉅片」(松山・玉成劇場)と、本映画が「中日合作」として宣伝されている。
- 18 この日台合作の顛末については注13山崎インタビューに詳しい。
- 19 『聯合報』1969. 2. 11。
- 20 『聯合報』1969. 2. 11。
- 21 『經濟日報』1969. 5. 8。
- 22 『聯合報』1969. 6. 11、6. 14、6. 18~7. 11。
- 23 『聯合報』1969. 6. 20、6. 21。なお、「神童桃太郎」の映画広告でも、金子の名前は「小飛龍金子吉延」と紹介されている。